

【短報】チュウジョウケシタマムシの渡嘉敷島からの記録

チュウジョウケシタマムシ *Aphanisticus okinawanus* Ohmomo, 2004 (図1) は、沖縄島与那で得られた個体に基づいて、Ohmomo (2004) により記載されたタマムシ科甲虫であり、沖縄島のみ分布している (大桃・福富, 2013)。今回、沖縄諸島の渡嘉敷島から採集された本種の標本を確認したので報告する。

1♀, 沖縄県島尻郡渡嘉敷村渡嘉敷島森林公園, 26.

III. 2014, 保科英人採集, 福富保管 (図1).

照葉樹林のリターより採集した標本から、本種を確認した。

発表にあたり、本種の標本を恵いただいた福井大学の保科英人博士、標本撮影について助言いただいた石川県ふれあい昆虫館の渡部晃平氏に感謝する。



図1. チュウジョウケシタマムシの成虫。

引用文献

- Ohmomo, S., 2004. Buprestid beetles (Coleoptera: Buprestidae) new to Japanese fauna (Part 2). The Entomological Review of Japan, Osaka, 59 (2): 135–143.
大桃定洋・福富宏和, 2013. 日本産タマムシ大図鑑. 206 pp. むし社, 東京.

(福富宏和 920-2113 白山市八幡町戊3 石川県ふれあい昆虫館)

【短報】徳之島におけるオオゾウムシの記録

オオゾウムシ *Sipalinus gigas gigas* (Fabricius, 1775) は、日本 (伊豆諸島, 対馬, 琉球を含む), サハリン, 東シベリア, 朝鮮半島, 台湾, 中国, 東南アジアに広く分布する (小島・森本, 2004)。琉球列島においては、沖永良部島, 沖縄島, 古宇利島から記録があり、徳之島の記録はない (佐々木ら, 2002)。筆者は徳之島で本種を採集しており、同島初記録と思われるので報告する。

1ex. 20. X. 2016, 鹿児島県天城町平土野; 1ex. 20. X. 2016, 鹿児島県天城町亀津 (図1)。いずれも筆



図1. 徳之島産オオゾウムシ。

健志・木村正明・河村 太編, 増補改訂琉球列島産昆虫目録. 沖縄生物学会, 西原.

(小浜継雄 901-2216 宜野湾市佐真下28)

者採集. なお、これらの標本は琉球大学博物館 (風樹館) に収蔵されている。

上記の2個体はいずれも灯火で採集したものである。

引用文献

- 小島昭昭・森本 桂, 2004. 日本産ゾウムシ上科のオンライン目録とデータベース. 九州大学総合研究博物館研究報告, (2): 33–147.
佐々木健志・木村正明・河村 太, 2002. コウチュウ目 (鞘翅目). pp. 157–284. In: 東清二 監修, 屋富祖昌子・金城政勝・林 正美・小濱継雄・佐々木

【短報】沖縄島初記録のムツキボシテントウ

ムツキボシテントウ *Oenopia scalaris* (Timberlake, 1943) は、日本 (本州, 伊豆諸島, 九州, 小笠原諸島), 朝鮮半島, 台湾, 中国, インドシナ半島, ミクロネシアに広く分布する (佐々治, 1985; 日本環境動物昆虫学会, 2009) が、これまで琉球列島からの記録はない (佐々木ら, 2002)。筆者らは沖縄島で本種を採集しているため報告する。



図1. 沖縄島産ムツキボシテントウ。

1ex. 27. III. 2017, 沖縄県恩納村万座毛 (図1)。小浜継雄採集. 標本は琉球大学博物館 (風樹館) に収蔵されている。

比較的目立つ本種がこれまで琉球列島から記録がなかったことから、

沖縄島の本種は外来種の可能性がある。

引用文献

- 日本環境動物昆虫学会編, 2009. テントウムシの調べ方. 文教出版, 大阪. 148 pp.
 佐々治寛之, 1985. テントウムシ科. pp. 245-270. In: 黒澤良彦・久松定成・佐々治寛之編著, 原色日本甲虫図鑑 3 巻. 保育社, 大阪.
 佐々木健志・木村正明・河村 太, 2002. コウチュウ目 (鞘

翅目). pp. 157-284. In: 東 清二 監修, 屋富祖昌子・金城政勝・林 正美・小濱継雄・佐々木健志・木村正明・河村 太編, 増補改訂琉球列島産昆虫目録. 沖縄生物学会, 西原.

(小濱継雄 901-2216 宜野湾市佐真下 28)
 (長田 勝 901-2212 宜野湾市長田 2-12-9
 ヒルズテラス 2-D)



超拡大で虫と植物と鉱物を撮る —超拡大撮影の魅力と深度合成の テクニック(自然写真の教科書1) 日本自然科学写真協会(SSP)(監修) 文一総合出版 128ページ 2017年5月9日発行

昆虫の研究や趣味において写真は大切である。百聞は一見にしかずのとおり、精緻な写真は非常に豊富な情報を提供してくれる(絵は絵で、写真では表現できない説明を可能とすることは言うまでもない)。また、標本では残せない昆虫の生きた魅力も、生態(生体)写真では生き生きと描写できることもある。

本書は、昆虫、植物、鉱物を対象として、その名のとおり「超拡大」の撮影法、さらには最近普及しつつある深度合成の方法に焦点を当てて解説している。

もちろん、本書で扱っているのは、昔の銀塩写真ではなく、デジタル写真であり、その道具はあくまでデジタルカメラである。

精緻な撮影技術には、まずはカメラの性質をよく知っておかなければならないが、本書はまず、カメラ(主にレンズ)の仕組みと理論のわかりやすい解説から始まっている。また、どんなレンズでどんな写真が撮れるのか。本書全体に通じるところだが、非常に美しい作例とともに詳しく解説されている。

続いて通常マクロ撮影のさまざまな解説があり、微小な虫の撮影技術として、好蟻性昆虫と土壌生物の生

態写真の撮影法が紹介されている。それぞれ若手写真家の小松貴と吉田譲によるもので、私からすれば本書の一番の読みどころだった。微小種の写真撮影の可否は、ほとんどが光の当て方によって決まる。これらの解説は、いかに均一に光を当てるかという方法論についてが主であり、二名の解説者が長い時間をかけて開発した方法が惜しげもなく示されているのは貴重である。

後半は深度合成撮影法である。この世界の第一人者である小椋山賢二による基礎知識の解説に始まり、顕微鏡を用いた方法やコンパクトカメラを使った方法まで言及されている。白バック撮影や野外でハムシを用いた深度合成の方法まで紹介されており、非常に面白い。

ただし、われわれ甲虫研究者が参考にしたいところである3~10ミリメートルほどの標本を対象とした深度合成撮影法に関しては、直接役に立つ方法はあまり紹介されていない。鍵となるディフューザーの種類と使い方や、カメラをコピースタンドに固定し、標本を上下移動する簡易な方法について詳しく書かれていないからだ。手前みそだが、それについては、以前に筆者が紹介した

方法(丸山2010:月刊むし473:38-42)のほうが有用と思われる。しかし、ソフトの比較例や合成の難しい部分、さらなる超拡大など、種子や鉱物の撮影法を含め、本書に詳しく書かれているさまざまな応用例は、標本の撮影にも新しいヒントを与えてくれるに違いない。

(丸山宗利 九州大学総合研究博物館)

